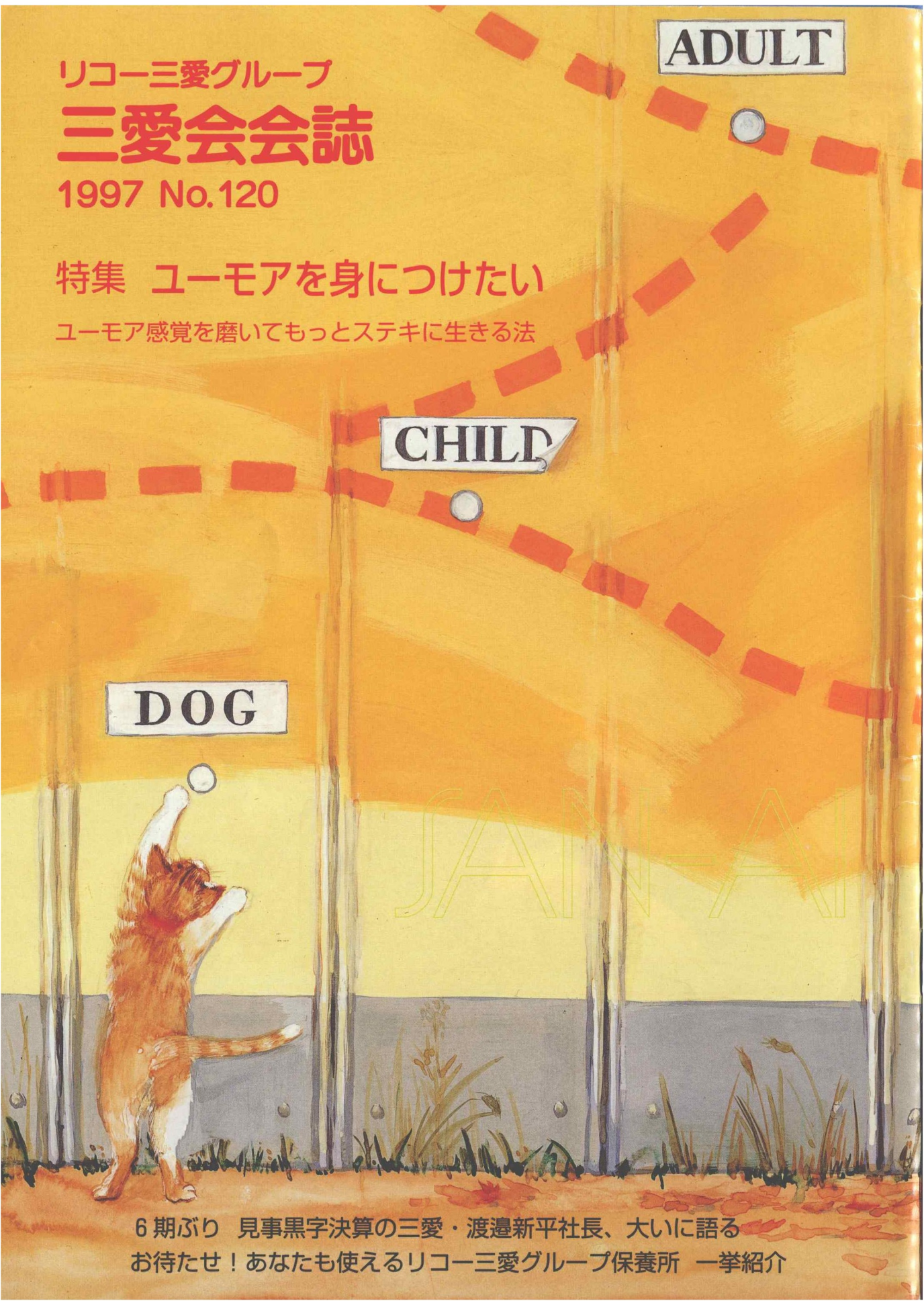
リコー三愛グループ

三愛会会誌

1997 No.120

特集　ユーモアを身につけたい

ユーモア感覚を磨いてもっとステキに生きる法



6期ぶり　見事黒字決算の三愛・渡邉新平社長、大いに語る

お待たせ！あなたも使えるリコー三愛グループ保養所　一挙紹介

特別寄稿

ユーモアは人生のスパイス

織田正吉

一九三一年神戸市生まれ。五五年、神戸大学法学部を卒業。以来、テレビ・ラジオの演芸番組などの作、構成に当たる。七七年、「小倉百人一首」の成立に関して新説を唱える。八八年、兵庫県文化賞受賞。現在、園田学園女子大学短期大学部講師、日本笑い学会副会長、関西演芸作家協会顧問。『笑いとユーモア』（筑摩書房／ちくま文庫）『ジョークとトリック』（講談社現代新書）『百人一首の謎』（講談社現代新書）『日本のユーモア』（筑摩書房）など、著書多数。笑いとユーモアについて、幅広い知識と経験に裏づけられた理論家として著名である。

織田正吉（おだ・しょうきち）氏プロフィール

生活の中のユーモア

日曜日になると競馬場へ行くので、奥さんから外出を禁じられた男の人が、四歳になる男の子を散歩に連れて行くと言って出掛けました。子供を連れているので、奥さんも安心して送り出しました。男の人はさっそく競馬場へ行き、男の子に「ママに聞かれたら、動物園へ行ったと答えるんだぞ」と教えました。夕方、帰宅すると奥さんがその子に、「きょうは、お父さんとどこへ行ったの？」「動物園」「よかったわね。どんな動物がいた？」「お馬サンばっかり」。

これは私の好きなジョークです。作り話ではなく、案外本当にあったことかもしれません。俵万智の『サラダ記念日』は二百万部を超えるベストセラーになり、短歌ブームに火をつけた歌集ですが、その中にこんな歌があります。

我が髪を三度切りたる美容師に「初めてですか」と聞かれて坐る

五分間テレビに出演する我のために買われたビデオ一式

若い女性の初々しい感性もさることながら、『サラダ記念日』にはこういうユーモアが含まれていることも見落とせません。そこに人間がいる限り、微笑の材料はいくらでも転がっています。

笑いの分類

笑いはユーモアとウイットに分類されます。ユーモアの定義は人さまざまですが、ごく大ざっぱに言うと、人間が人間であるために起きる小さな失敗やとぼけた言動が生む笑いがユーモアだと言えるでしょう。これに対して、頭の回転の速さが生む知的な笑いがウイットです。

ドラマの本番で、ある俳優が自分の役名を度忘れしたので、ポケットからそれらしい紙を出し、名刺のように見せかけて「私、こういう者でございます」と差し出すと、相手の俳優はそれを眺めて「何とお読みするのですか?」と聞いたそうです。この返事の仕方はウイットと言えるでしょう。ウイットは機知、頓智(とんち)などの訳語がありますが、頓智の「頓」は「即座に」という意味です。

角度を変えて、笑いの性質について整理しておきましょう。笑いには大きく分けて三つの性質があります。親和性、攻撃性、娯楽性です。まず、親しい人に笑顔を向けることによって、愛情や敵意のないことを示します。それに対して、失敗する人や無知な人などに向ける嘲笑が攻撃の笑いです。親和性と攻撃性――笑いは時と場合によって、全く相反する意味を持つのです。

平安時代の『今昔物語集』には、自分の影を侵入した賊だと思っておびえる臆病な武士や、唇を亀に噛みつかれてもがき苦しむ男などを笑う説話が出ています。こういう笑いの対象になる人を「ヲコの者」と呼びました。「ヲコ」は烏滸、尾籠などさまざまに表記します。この笑いは攻撃性の笑い、嘲笑です。アメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトが『菊と刀』で指摘していることですが、日本人は子供のときから「そんなことをすると笑われますよ」と言って不作法をたしなめられてきたために、嘲笑に対して敏感で、笑われることを恥だと思う習性を身につけてきました。この場合の「笑われる」は「ヲコの者と見られる」という意味です。女の人が笑うとき口元を手で隠すように、人の前ではなるべく笑いを見せない習俗が日本に生まれたのはそのためでしょう。

現在は、若い層が自由に笑いをふりまくようになり、この習俗は消えつつあります。嘲笑だけが笑いではないから、笑いを抑圧する社会的習慣が取り払われるのはいいことですが、昔ながらの笑いの習俗を身につけ、それを苦々しく見ている人がいないとは言えません。

笑いの治癒力

漫才、落語、スラップスティック（ドタバタ喜劇）などのギャグが生むのは娯楽性の笑いです。漫才やドタバタ喜劇を、笑わせるだけで何も残らないと言って軽べつする人がいますが、最近、こういう笑いの持つ治癒力が注目されるようになりました。そのきっかけを与えたのは米国の著名なジャーナリスト、ノーマン・カズンズです。

一九四六年、四十九歳のとき重症の膠原(こうげん)病にかかったカズンズは、ビタミンCの大量投与と併せ、笑うことで病気の激痛と戦いました。

病室で喜劇映画やテレビの「どっきりカメラ」を見、看護婦が読んでくれるジョークの本で大笑いしたのです。十分間笑うと二時間は痛みが和らぎ、眠ることができたといいます。こうしてカズンズは医師から全快の見込みが五〇〇分の一と宣告された難病を克服し、現役に復帰しました（松田銑訳『笑いの治癒力』岩波書店）。

日本では倉敷市で「生きがい療法」を試みている伊丹仁朗医師が、一九九一年、ガンと心臓病の患者十九人に大阪の「なんばグランド花月」で三時間お笑いを見せ、ガン細胞を殺すNK（ナチュラル・キラー）細胞の活性が正常化することを実証しています（井上宏ほか『笑いの研究』フォーユー）。

ユーモアの発信と受信

ユーモアを感じたり、発信したりすることのできるセンスがユーモア感覚です。ユーモアの感性を発信装置と受信装置に分けた場合、どちらかといえばユーモアをユーモアとして受け取る受信能力のほうが大切なのではないかと思います。

ある日の夕刻、水道の水が風呂からあふれているのを見た幼い女の子が、台所にいるお母さんに「たいへん、たいへん。お風呂が足りないよ」と言ったそうです。子供のユーモアは固定観念で固まっている大人の頭に陽性の刺激を与えてくれます。しかし、子供にはユーモアを発信しているという自覚はありません。世間的な意味でいう常識がないために、たまたま「お風呂が足りない」という奇抜な表現になったのに過ぎないのですが、ユーモア感覚はそれをユーモアとしてキャッチします。

意識してユーモアを発信する人は、相手に

●三愛新書にもユーモア関連情報が掲載されています

〈三愛新書の新刊・第63集から〉

●笑いの発見　神津友好

テレビ・ラジオなどでご存知の方も多い演芸作家・神津友好氏が、古典落語から現代芸能に至るまでの笑いの世界、身近で起こるおもしろいエピソードなどをユーモアたっぷりに紹介。笑いの原点に迫ります。

●健康―内と外から　高島　巌

織田正吉氏の特別寄稿「ユーモアは人生のスパイス」で紹介された、笑うことでガンをやっつける細胞が活性化するという話についての紹介があります。

〈第52集から〉

●生と死について考える　アルフォンス・デーケン

「人生におけるユーモアの役割」について触れ、〝ユーモアは人間らしく生きるために欠くことのできない条件〟と述べています。

三愛新書の購入をご希望の方は、三愛会事務局までお申し込みください。

☎〇三―三五四一―四〇五一

担当：大塚恵美子

受信装置が備わっていることを期待しています。相手にその装置がないと、ユーモアが逆効果になることさえあります。

やや古い話ですが、「マリリン・モンローは裸で寝る」という噂が日本中にひろがったことがありました。インタビューで「寝るときは、どんなものを着ていますか?」と聞かれたモンローが「シャネルの五番」と答えたのがそのように伝えられたのです。「何歳ですか?」と聞かれた女性が「生まれはダブリンです」と答えたという話がありますが、それと同じように「女性に寝姿を聞くなんて失礼ね」と怒るかわりに、モンローは「香水は何を使っていますか?」と聞かれたかのようにはぐらかした。これはユーモアです。ところが聞き手の受信装置が壊れていたために、それを言葉通りに受け取ってしまったのです。

知人から聞いた話ですが、外国のある動物園のワニの檻の前に「餌をやらないでください」という掲示が出ていたということです。命令口調になるのをユーモアで和らげていることは言うまでもないでしょう。しかし、モンローは裸で寝ると思っている人がこれを見ると、「入園者に危険なことを要求しては困る」と苦情を持ち込むかもしれません。

味覚、音感、色彩感覚などに個人差があるように、ユーモアの感覚も人によって差があります。ユーモアのないことを真面目と取り違え、むしろそれを好意的に見てきた日本人の間には、感性の中にユーモアの受信装置を備えないまま育ってしまった人がいるので、ユーモアの発信はなお要注意です。

ユーモアが力を見せるとき

ユーモアは、必要以上の緊張や気まずさを適度にほぐしてくれます。プロ野球の投手だった江夏豊氏の現役中の話ですが、自信を持って投げた球を主審が「ボール」と判定したので、「今のがボールか」と江夏投手が詰め寄ると、主審は「ハガキ一枚の差」と突っぱねました。「そのハガキはタテかヨコか」と食い下がると、主審が「厚さだ」と言ったので、江夏投手も苦笑して引き下がったということです。

ユーモアが特に力を発揮するのは、さまざまな形でぶつかる困難に立ち向かうときです。第二次大戦中、ドイツの空襲によって半壊したロンドンのデパートが、「本日より入口を拡張しました」という看板を出したのは有名な話です。私は神戸に住んでいますが、阪神大震災でがれきの山と化した市街を見ながら、心の隅で英国人のしたたかなユーモアを思い出していました。

ここで札幌市の村田忠良さんという医師から贈られた本にある話をぜひ紹介したいと思います。長い療養生活をしているイタリア人の神父が、検査のあと疲れきって廊下のソファによりかかっているので、村田医師が「どうなさったの」と声をかけると、「天国は近づいた」と言う。「だめだめ。天国は今満員だそうですよ」と励まして去りかけると、背中に「増築した」と言う神父の声が聞こえたそうです。「抱き合って肩をたたきながら、そのたくましく清冽(せいれつ)なユーモアに泣いた」と村田さんは書いておられます（村田忠良『老いの人間学』サンパウロ）。

ユーモアは、より良く、より強く生きるための人生のスパイスです。単に人を笑わせることではない。ユーモアに泣くこともあるのです。